

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 11 日現在

機関番号：27104

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520689

研究課題名(和文) 意識的な語彙・文法学習を取り入れた多読プログラムの開発とその教育的効果の検証

研究課題名(英文) Creating an extensive reading program incorporating intentional learning of vocabulary and grammar and the educational effects of the program

研究代表者

水野 邦太郎 (Mizuno, Kunitaro)

福岡県立大学・人間社会学部・准教授

研究者番号：40320840

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円、(間接経費) 1,080,000円

研究成果の概要(和文)：Oxford Bookworms (OBW)の読書を通じて、どのような英語力を高めることができるか明らかにするため「OBWコーパス」を構築した。各ステージを「単語」「語彙チャンク」「文法」の観点から分析し、分析結果を基に、授業で「OBWの英語表現」を明示的に取り上げ学習する機会を定期的に設けた。このような教育的な働きかけの効果を吟味するため、学期始めと終わりにテストを実施した。結果は語彙力・文法力の面で大きな変化がなかった。一方、読解力の平均点が伸びた。本研究を発展させるために、OBWの英語の分析データをいかに明示的な語彙・文法学習に活かしていけるか、研究していく必要がある。

研究成果の概要(英文)：This study investigated how the English proficiency can be enhanced through the combination of extensive reading of the Oxford Bookworms (OBW) and intentional learning of vocabulary and grammar used in the OBW. The OBW corpus was constructed and analyzed to reveal the English features of the OBW in terms of words, lexical chunks, and grammar. Based on the findings, an intentional learning of vocabulary and grammar was implemented regularly during the class while learners were reading the OBW extensively outside of the class. In order to examine the effects on their linguistic proficiency, a test was given at the beginning and at the end of the semester. While there were no significant differences between the two in the development of vocabulary and grammar, the average reading score was improved. In order to develop this study further, it is important to reconsider the contents and methods of the intentional learning making the best use of the OBW data discovered in the system.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・外国語教育

キーワード：多読プログラム

1. 研究開始当初の背景

外国語学習における多読は母語における多読の付随的語彙学習とは異なり、多読だけでは語彙の習得率が低く不適切であることが指摘されている：(1)知らない言葉をとばすため語彙知識の増大にはほとんど貢献していない(Stahl, 1999)、(2)未知語の意味を推測することを奨励するが「誤った推測」が行われる危険性を伴う(e.g. Nassaji, 2003; Parry, 1991)、(3)語彙の「定着・習熟・深さ」に対する効果は疑問視されている(e.g. Folse, 2004; Laufer, 2003; Nation, 2001; Roszell, 2006)。

したがって、上記の背景およびこれまでの研究成果が示す教育的示唆として、次のような研究課題を引き出すことができる。それは、「授業外」で行われる多読を通じた付随的語彙・文法学習をより効果的に促進するために、「教室」という場所で「どのように語彙・文法に対する気づきと感受性を高める教育的工夫を施すことができるか」という課題である。

2. 研究の目的

(1) 多読を通じた付随的語彙・文法学習をより効果的に促進するために、Oxford Bookworms(OBW)シリーズを例にとり、OBW コーパスを構築する。そして、ステージ 1 から 6 の英語の特徴を「単語」「語彙チャンク」「文法」の観点から分析できるシステムを開発する。

(2) OBW コーパスの分析結果から、OBW シリーズの多読がどのような語彙・文法学習を可能にするかを考察する。

(3) (2)の考察をふまえ、授業で明示的に語彙・文法を学ぶ機会を定期的につくる。授業で行った英語という「外国語」に対する「意識の高揚(Language Awareness)」が、学生たちの英語力にどのような効果を及ぼ

すかをテストを通じて検証する。

3. 研究の方法

(1) OBW シリーズの各ステージから、人気の高い 10 冊を選びコーパス化した(無断でテキストを電子化することは著作権法に触れるため、オックスフォード出版局の編集部とシリーズの編集主幹、Jennifer Bassett 氏から承諾を得た)。60 冊のテキスト(総単語数 868,462 語)を「単語」「語彙チャンク」「文法」の 3 つの観点から分析し、分析結果をエクセルでダウンロードできるデータ・ベースを構築した。

(2) テキストの分析と考察は Usage-Based Model(UBM) と Word Grammar(WG)の 2 つの理論に基づいて行った。

UBM では、学習者がどのような種類(タイプ)の単語やチャンクと(タイプ頻度)、どのくらいの「頻度」で出会うか(トークン頻度)が、語彙・文法の習得において重要な役割を果たすと考える(Tomasello, 2003)。この観点から、OBW シリーズの「各本」「各ステージ(10 冊)」「全シリーズ(60 冊)」を読んだ場合の、「単語」と「語彙チャンク」の「タイプ頻度」と「トークン頻度」を分析した。そして、WG の観点から、単語を使用する際にどのような文法的リソースが必要か、高頻度の単語 100 語について考察した。

(3) 平成 25 年度の多読の授業で、OBW シリーズを読書する際に高頻度で出会う「単語」「語彙チャンク」「文法」を明示的に取り上げ学習する機会を定期的につくった。その教育的効果を検証するため、4 月と 1 月に英語力の測定を行うためのテスト「G-TELP」と「語彙力・文法力」をみるテストを行った。

4. 研究成果

(1) OBW 60 冊のテキストを量的・質的に分析し考察できるシステムをインターネット上に構築した。

(2) OBW コーパスを、代表的な学習単語リスト(ALC 12000, Basic English 850, GSL2000, JACET 8000)で分析し、各単語リストの「カバー率」を明らかにした。GSL2000 を例にとると、「各本」「各ステージ」において、85%以上が GSL2000 の単語リストで執筆されていることが分かった。したがって、学習者は多読をすればするほど GSL2000 の単語と集中的に

繰り返し出会えることが明らかになった。一方、「語彙チャンク」のレベルでは、各シリーズを10冊ずつ読破し「全冊(60冊)」読破しても、出会える「語彙チャンク」の「種類」と「頻度」は著しく低いことが明らかとなった。例として、lookの語彙チャンク「look + -ly 副詞」のデータを以下に挙げる。「-ly 副詞」の種類(タイプ頻度)は56である。その中でangrily, carefully, seriouslyのみが全ステージで使われている。56種類の「-ly 副詞」のうち6割は、出現頻度が「1回」のみである。出現頻度が10回以上に及ぶ「-ly 副詞」は、以下の「-ly 副詞」のみである: carefully(44回), closely (26回), quickly (15回), anxiously(11回), sadly(11回), angrily(11回), coldly (10回)。

したがって、英語の運用能力の鍵を握る「語彙チャンク」に「習熟」するためには、多読と「並行」して「語彙チャンク」を「明示的に学習することにより、効率的かつ効果的な「語彙チャンク」の学習を実践することができるといえる。

(3)授業で、look という単語についての意識化を図るため、以下のlookの性質特徴を明示的に取り上げた: (a) lookの中核的意味をseeとwatchと比較して理解する、(b)lookを使用する際に必要となる文法項目を学ぶ、(c)lookの語彙チャンク(look + -ly 副詞, look + 方向詞)を学ぶ。

このような明示的な語彙・文法学習の効果を見るため、学期始め(4月)と学期末(1月)に2種類のテストを実施した:

「文脈から一番ふさわしい単語を、同義語から選択する」「単語にバラバラに分解されたチャンクを統語的に正しく並べる」。テスト結果は、1月の平均点と4月の平均点で大きな変化がなかった。その原因として、(a)(b)(c)の観点からのlookへの意識化の方法を、興味深く有意に

提示できなかったことが考えられる。今後、構築したGR Databaseをいかに授業で活用していけるかが大きな課題である。一方、「英語の運用能力」の変化を見るために行ったG-TELPの結果は、特に「リーディングセクション」の点数についてt検定を用いて比較したところ、有意確率5%水準で有意な差が見られた。平均点を比較したところ、1月の平均点が高いことから、本研究がデザインした多読による学習効果があった可能性が示唆された。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表](計4件)

Mizuno, K. Constructing linguistic knowledge utilizing the Oxford Bookworms library series corpus designed for data driven learning. AILA World Congress. Brisbane Australia. 2014年8月 (accepted).
Mizuno, K. Lexical chunks in the Oxford Bookworms Library (OBW) series: A case study of "HAVE" collocations' JALT 39th Annual International Conference. Kobe Convention Center. 2013年10月27日.

Mizuno, K. Extensive graded reading and usage-based theory of language acquisition. The 2nd Extensive Reading World Congress. Yonsei University, Seoul, Korea. 2013年9月14日.

Mizuno, K. Systematic Research on the "Graded" of Oxford Bookworms Library Series. The 5th Annual Extensive Reading Seminar. Sugiyama Jogakuen University. 2012年7月1日.

〔図書〕(計1件)

Mizuno, K. Creating “ Reading Circles ” in the classroom and on the Internet. In New Ways in Teaching Reading, revised. Day, R. Richard (Ed.). pp.36-37. TESOL International Association. 2013.
査読有.

〔その他〕

ホームページ等

GR Database

<http://www.ilc-irc.jp/wp/obwadmin/auth/login>

6 . 研究組織

(1)研究代表者

水野邦太郎 (MIZUNO KUNITARO)

福岡県立大学 人間社会学部 准教授

研究者番号：40320840